

静岡新聞 2025 年 3 月 26 日 付

論壇

東京大名誉教授(国際経済学)

伊藤 元重

全国の市町村から書店が消滅しつつある。こうした事態を憂慮して、「町の本屋さん」を存続させようという運動もあるようだ。読者の皆さんはこの問題をどう考えるだろうか。

私にとっては、書店は非常に貴重な存在だった。私が育った静岡市では、商店街に何軒か大きな書店があった。そうした店を週に2度ほど訪れるのが、高校時代の私の習慣であった。購入するためというよりは立ち読みの方が多かった。書店には申し訳なかったが、書店でさまざまな書籍をめくることが当時の私にとって貴重な時間だった。

私と書店の関係は、高校を卒業しても続く。私は東京大学に入学したが、大学生協の書店には毎週のように足を運んだ。東大の生協の書店は学生や研究者のニーズをよく把

深刻な「買い物難民」問題

握しており、その品揃えは非常に優れたものだった。書店の中で1時間ほど過ごすことで、さまざまな優れた書籍に触れることができた。もちろん、その多くは私の専門の経済学以外のものだった。広い分野の書籍に触れることができることが、一般書店の強みである。

私の人生と書店との付き合いはその後も続く。海外で滞在する時も、時間があれば書店を覗くことが多かった。米ハーバード大学の近くにある書店で平積みにしてある本は、その大半が購読して良かったと思うものだった。仕事で短期間の訪問が多かったワシントンにも、私の気に入った書店があり、そこで書籍を見るのが出張中の貴重な時間となった。

こうした形で書店と付き合いってきたが、残念なことにそうした機会が最近はずいぶん減っている。何よりも近隣の書店の数が減ってしまった。書籍を購入するのも大半はアマゾンなどのオンラインショッピングを利用している。ただ、購入する書籍が決まっている時にはオンライン購入は便利だが、書店の中をうろついて面白そうな書籍を探すということはできない。

以上のようなわけで、世の

中で「町の本屋さん」を復興しようという運動が広がっている。ただ、公的な支援を期待することも難しそうだし、具体的にどのような運動をしたらいいのか分からない。

もっとも、小売店の変化が私たちの生活に大きな被害をもたらしているということはいえ、書店よりもっと深刻な問題がある。買い物難民の問題だ。中小小売店の減少や市町村の過疎化によって、徒歩圏内で食料品や日用雑貨の購入できる店がない人が増えている。特に自動車を運転できない高齢者にとって、この問題は深刻である。

書店と同じように食料品店も、ビジネスとして運営されているものである。客の数が減少して採算が合わなくなれば、閉店ということになる。しかしビジネスの観点だけでは閉店されては、周囲の住民の生活に大きな被害が及ぶことになる。書店の問題にすぐに対応できるかは分からないが、食料品の買い物難民への対応は待たない状況になりつつある。書店も食料品店も含めて、小売業の提供している社会的価値についてきちっと考える時期に来ている。